

## 大学の授業での批判的思考力育成の支援の試みと課題

企画者 沖林洋平 (広島大学大学院教育学研究科)

司会者 西垣順子 (大阪市立大学大学教育研究センター)

話題提供者 藤木大介 (梅光学院大学 子ども学部 子ども未来学科)

沖林洋平 (広島大学大学院教育学研究科)

平山るみ (京都大学大学院教育学研究科)

杉浦義典 (広島大学大学院総合科学研究科)

指定討論者 森 敏昭 (広島大学大学院教育学研究科)

楠見 孝 (京都大学大学院教育学研究科)

### 企画趣旨

沖林洋平

近年、大学教育における、難解な文章の読み書きや、自らのバイアスにとらわれない適切な判断、あるいは適応的な人間関係の構築などに対する教育的支援への関心が高まっている。このような、文章読解や産出における形式的・修辭的論理の一貫性の把握、自らの信念に反する事柄に対して証拠に基づいた判断、未知の事象に対する探究活動などに重要な役割を果たすのが批判的思考である。

批判的思考に関しては、教育心理学の関連領域においても研究論文が発表されるようになってきている(平山・楠見, 2004; 道田, 2001; 田中・楠見, 2007)。このような状況は、批判的思考に関する教育心理学関係者の関心の高まりを反映するものであるといえるかもしれない。また、大学教育を実践する上での批判的思考教育の必要性に関して、広く認識されるようになってきているのかもしれない。

そこで本シンポジウムでは、このような近年の状況を踏まえて、いくつか異なる大学ならびに授業科目において批判的思考力の育成を試みた話題提供者により、大学の授業での批判的思考力の育成の支援に対する現状と課題についてフロアも交えて広く議論を深めたいと考えている。

また、本シンポジウムでは、批判的思考の教育効果の測定について、批判的思考とメタ認知の関連という観点を提案したいと考えている。これは、近年、批判的思考とモニタリングの機能的関連が明らかにされるようになったこととともに、不安の高い学生への予防的・治療的な心理教育的支援活動におけるメタ認知の役割の重要性が指摘されるようになってきているからである。

### 大学教育を通じた批判的思考態度の形成

—心理学専攻の新生が抱く「心理学的な考え方」イメージの影響—

藤木大介

大学教育においては、高度な専門知識の伝達だけでなく、専門教育を介して様々な問題の発見方法やその解決方法に関するトレーニングが行われる。この問題解決のための能力を支えるものの1つに批判的思考がある。したがって、大学教育では自ずと批判的思考力の育成を目標としている。

しかし、大学教育の中でその能力が十分に育成されているかという点、必ずしもそうとは思われない、また、それ以前に、大学生は批判的に考えるという思考スタイル自体を知らない恐れすらある。そこで本研究では、大学生が専門教育を通して批判的な思考態度を身に付けるために、自身の専攻に対してどのようなイメージを持っているべきであるかを検討した。調査対象者は心理学を専攻する学部1年生であった。入学直後に「心理学的な考え方とはどのようなものだと思いますか」という質問をし、客観性について触れた回答をした学生とそうしなかった学生とに分類した。そして、入学直後とその3ヶ月後の批判的思考態度尺度の得点の変化を両群で比較した。その結果、自己の思考に対する自信などに関する「論理的思考の自覚」因子と、客観性を保とうとすることなどに関する「客観性」因子とにおいて、その得点が客観性について触れた群の方が有意に変化していた。この結果からは、専攻分野に対して適切なイメージを持つ学生ほど、早期に自己の批判的思考態度に対して自覚的になり、自己の論理的思考をモニターする態度や客観性を重視する態度が形成

されると考えられる。したがって、大学入学後のできるだけ早い段階で批判的思考態度を形成させるためには、新生にその専攻に対する適切なイメージを持たせることが効果的である。

### 心理学概論を通じての批判的思考態度の育成

平山るみ

批判的思考の育成のためには、心理学教育の中で人の思考の性質に関する知識獲得も、有効な要因のひとつであると考えられる (e.g., 宮元, 2000)。また一方で、心理学教育の目標として、批判的思考の育成は、大きな目標となっている (スタンバーグ, 2000)。

そこで本実践では、次の 2 点を目標とした。第 1 に、大学 1 年次の必修科目である心理学概論の授業を通じて、批判的思考態度を育成することであった。第 2 に、どのような授業が批判的思考の育成により有効かを検討するため、授業への参加や理解度、内容の有用性の認知といった、授業の捉え方と批判的思考態度との関連を検討することであった。

参加者は、私立女子大学の 1 年次の必修科目である心理学概論の受講生、心理学専攻クラス 46 名、臨床心理学専攻クラス 63 名であった。そして、授業の事前事後での批判的思考態度の変化を測定するため、批判的思考態度尺度 (平山・楠見, 2004) を授業の第 1 回目および最終回である第 15 回目に実施した。さらに、授業内容をどのように捉えているかを測定するため、授業に関するアンケートを第 15 回目に実施した。

批判的思考態度の下位尺度ごとにみると、心理学専攻および臨床心理学専攻のいずれのクラスにおいても、上昇したものが 30-48%、下降したものが 34-46% であった。つまり、批判的思考態度は、方向性は一定ではないものの変化したものが多く、半期の授業を通じて、何らかの影響を与えていた可能性が示唆された。さらに、批判的思考態度の下位尺度ごとの得点変化 (事後-事前) と、授業評価との関係を検討した。その結果、心理学専攻クラスにおいては、内容が将来において役に立つとの評価が、証拠の重視因子の得点変化との間に正の相関がみられた。一方、臨床心理学専攻クラスにおいては、内容が将来において役に立つとの評価が、論理的思考への自覚因子の変化との間に負の相関がみられ、学生の専攻や興味関心に

よって、批判的思考態度の育成に有効な授業は異なる可能性が示唆された。

### 治療的变化と批判的思考：メタ認知の観点から

杉浦義典

認知行動療法 (CBT) と批判的思考にはいくつかの類似点がある。(a)自分の考えを支持する/しない根拠を探す。(b)自分のもつバイアスなどに気づく。(c)柔軟な応用を重視する。

一方、興味深い差異もある。例えば正確な判断を行うことの重要性である。対人不安の場合、自分がどの程度好感を持たれているかを正確に判断することはあまり重要ではない。むしろ、評価を気にするあまりにぎごちない行動を取ってしまうことが問題である。そのため、自分がネガティブな自己評価をしがちであるという事実に気づくことが重要である。

認知行動療法で仮定する「不適切な思考」は何事にも (特にネガティブな) 感情価を伴った評価をする傾向である。治療においては判断しない (nonjudgemental) 態度が重視されるが、これは思考を停止するのではなく、評価的な思考傾向を改めるという意味である。評価的な思考傾向は非常に変化しにくいいため、それをなくすよりも、自覚して距離をおくというメタ認知レベルの変化が必要になる。実際、近年の CBT では思考内容の正はあまり重視されなくなっている。その意味では、CBT の目指す変化は批判的思考よりも限局されている可能性もある。

また、論理的思考のマイナス面も考慮する必要がある。例えば、問題解決療法という CBT の一派では合理的問題解決のスキルが重視される。これは、批判的思考と重なる部分もあるが、場合によっては不安を強める場合もある (杉浦, 2003; Watkins, 2004)。論理的思考と心理的適応との関連を規定する媒介変数は明らかにされつつある。

CBT も批判的思考も多面的なプロセスである。そのため、どの部分がどの程度共通して、どのような差異があるかを測定研究を通じて検討することが有用である。例えば、批判的思考態度尺度 (平山・楠見, 2004) と認知的統制尺度 (杉浦, 2007) との相関を検討したり、あるいはジョイント因子分析を行うような研究が望まれる。また、実行機能のような共通要因の探索も重要であろう。